



ボルネオ 昨今

山 田 勇*

それは異様な風景であった。川幅 30 m ほどの急流のまん中に、竹で、丁度、植木屋のつかう三本バシゴのようなものをくみ、ボートとロタンで近くの木に結んで固定している。そして、水中メガネをつけたパンツひとつの男が、鉄ナベをもって、水中にもぐっては、砂をひろってまたあがってくるのである。目はランランとかがやき、写真をとられるのをいやがる。川の激しい流れと、裸の、水中メガネ男の集団は、何やらこの地域ののんびりした風土とはそぐわない感じであった。

また、流れのゆるやかな川岸の砂だまりに消防ポンプをもちこんで、砂をくずしている連中もみた。川岸の砂はみるみるうちにくずれ、土色に水を染めていく。上陸してみると 1 ヘクタールくらいの川岸がゴッソリとけずられている。

この二つは、いずれも、西カリマンタンのカプアス川流域の砂金通りの風景である。

カプアス上流のプナンの村へ入った時、多くの若者がカチャをつけて金をとるんだ、といったのは、このはじめの場面である。1980 年代に沈香がなくなったため、今、多くのプナンは、砂金を求めて川へ入るのである。

バンドンという、家形船で、ポンティアナックから上流へあらゆる生活物資をはこんでくる中国人の商人達は、物とひきかえにこの金をうけとることも多い。金は昔も今も、やはり、もっとも価値高く、人をひきつける産物である。海岸部の町のいくつかは、金をとる内陸部の基地としてさかえた。大勢の中国人がゴールドラッシュとして、東南アジアのこの島にも多く入ってきている。

カプアスの中流のシンタンから東のナンガピナウの上流へいった時は、このあたりも金がとれるという。一説によるとダイヤモンドも多いというのをたしかめてみたら、案内のスピードボートの運転手は、

「このあたりのダイヤモンドはまだ若いから、もう少しおいといた方がいい」とこともなげにいう。このあたりまでくると、地質年代と人間の尺度が一致するくらい、おおらかな発想になる。

プナンは、ボルネオの中央部の河川上流域にすむ狩猟採集民である。かれらの生活はいまだに、森に依存している。一部は定着して焼畑をおこなっているが、それでも、大部分の日常必需品は森からえている。

サラワクのムル国立公園で、プナンにあった。雨の森を、バナナの葉を傘がわりにして、こちらへ向かってきた。山刀をさし、鉄砲をもって、短パンツひとつであった。背中にサルをせおっていた。この森では、サルはとってはいけないことになっている。私と同行したガイドはかれに注意を与え、さらに、この道は通らない方がいいよと教えた。観光客と狩猟採集民は、あわない方がいいという配慮である。プナンの猟師は、あまり納得はできない様子であった。

かれの住んでいる村は、国立公園のすぐそばにあり、政府がたてた味けのないアパート式ロングハウスに住んでいる。国立公園が制定されて、公園内では、イノシシとシカ以外は狩猟禁止となり、しかも、吹矢以外のものはつかってはいけないことになっている。そして、遠からず、全面的に狩猟禁止になるという。おいつめられたプナンが、金をとりにいくのもやむをえないのかもしれないとアレコレ思いつつ、町へ出ると、サラワク政府が世界の熱帯林保護の声に応じて、伐採量をへらすということになり、木材業者は、その対応におわれている。失業者問題と木材価格の変化が、国際的にひきおこす影響などがとりざたされ、何やらさわがしい 1992 年の暮であった。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)

* Isamu Yamada, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University